

柳宗悦著「柳宗悦随筆集」岩波文庫、岩波書店 1996 年 1 月 16 日刊を読む

言葉の躰

1. (1) 嘆かわしいことの一つは、近來美しい言葉遣いをなかなか聞けなくなったことである。
(2) 特に女の人たちにそれが目立ち、耳ざわりになることが多い。
(3) それというのも、家庭で言葉の躰がなくなったからである。
(4) これは、だんだん社会に礼節が廃れてきたからによる。
2. (1) 私は小学科の 1 年から高等学科 3 年を卒業するまで 15 ヶ年も学習院の生徒だった。
(2) この学校は皇族や華族が多く、当時は「皇室の藩屏」を以て任じていた。
(3) こういう点は時代の風潮で、封建制度の名残であるが、しかし公平に見てこの頃のように何もかも封建制度が悪いようにいうのは行過ぎである。
(4) 学習院を内側から知ってる身は、いろいろとそこに弱味があるのを今も思い浮べるが、同時によかったと思う点もいろいろある。
(5) 品位というような性質は決して軽蔑すべきものではない。そこではしばしば丁寧なよい言葉が聞かれた。
3. (1) 学習院にいて非常に目立ったことの一つは、他の学校から転入してくる学生があると、その学生の言葉がひどく違うのにいつもおどろかされた。
(2) とても汚くて粗末なのである。
(3) そこには田舎の人の荒けずりな素朴な言葉の美しささえないと思った。
(4) 私がここで品というのは何も、きどった、しゃれたものでもなく、また衒った術語を並べるものでもなく、また高ぶったすました言葉でもない。
(5) 品格を重んずる伝統の中から、自から育くまれてくる言葉遣いである。
(6) 品位は下品、野卑などの反律であるから、一種の道徳的な位だともいえる。
(7) お互の言葉にそういう礼節をかわしたい求めが心の裏にあるのである。
(8) ここで礼節というのは他人の人格と自分の人格とを傷つけないようにすることである。
(9) つまりお互に相手を粗末に扱わないことである。
(10) それ故、自分をも粗末に扱わないのである。悪い場合は虚飾に落ちるであろうが、良い場合はこれが逆に人格を築いてくる。
4. (1) おそらく今の多くの人たちは、品位などは封建制の遺物にすぎぬと、その価値を蔑むであろうが、しかし礼節の徳は民主主義時代になっても重んぜられてよい。
(2) 言葉が野卑に流れることは、どんな時代にも自慢にはならぬ。

5. (1) 私がまだ学生だった時分は、英国人の英語と米国人の英語と、どこが違うのか、よく分りかねたが、英米に渡ってみて、あまりにも違うのにおどろかされた。
- (2) 何としても**米語より英語の方が品位がある**のである。
- (3) 米語にも率直な飾らないよい点はあるが、悪い面はとても野卑で、これを聞く英国人が顔を^{しか}顰めているのを何度も見た。
- (4) 欧州人は全体として米国人を良くいわぬが、それは米国人が用いる言葉遣いや音に原因することが大きい。
- (5) **言葉がどんなに人格を反映するか知れぬ**。
- (6) もし英国人が英語を捨てて、米語に替えたとするなら、**英国気質**はたちまちなくなるであろう。
- (7) 私が米国にいた時、ハーバード大学で、**バートランド・ラッセル**の講演を聞いたことがある。
- (8) あの英国の哲学者はなかなか頭の鋭い人であるが、その講演は**眼が覚めるほどの生粋^{きっすい}の英語**で、米国でそれを聞くのでよけい目立った。
- (9) その**品位ある言い廻し^{まわ}や音の美しさ**に大変打たれた。
- (10) **人格が言葉を生む**ともいえるが、**言葉はまた人格を変える**。
- (11) 米語も今のままではおるまい。
- (12) **文化が高まるにつれ、言葉にはもっと品位が求められてくる**であろう。
6. (1) **志賀直哉^{しがなおや}**のことは、ずいぶん大勢の人が書くが、**奥さんの康子さんのことは誰も書かぬから**引合いに出すことにする。
- (2) 私の知っている範囲で、一番美しい品のある日本語を不断遣いにしている女の人の一人は康子さんである。
- (3) おそらく康子さんは**悪い言葉、野卑な言葉を使うことを知らない**のである。
- (4) それほど両親や親類から**良い言葉の躰**を受けてきたのだと思われる。
- (5) もっとも生れが公家の家柄だから自然そうだったので、別に珍しいことでないかも知れぬが、**その言葉遣いが康子さんの性格にまで沁み込んでいる**のである。
- (6) それだからこそあのわがまを自認している志賀の一家を**丸く納めている**のだと思われる。
- (7) 志賀の小説には奥さんのことが沢山出てくるが、どんな場合でも、**好意のある気持ちのよい描写**である。
- (8) 一家にばかりではない。奥さんの**礼節のある言葉遣い**が、どんなに**多くの客に良い感じを与えている**か分らぬ。
- (9) たとえ志賀に反感を持つ人があったとしても、奥さんに反感を持ったような客はおそらく一人もあるまい。
- (10) それはいろいろ理由もあるが、一つには**小さい時から躰^{たまもの}られた美しい日本語の賜物**なのである。
7. (1) そんな**品位**などは前代の遺物だという人があるかも知れぬが、それなら**最も尊敬すべき遺物**だといってよい。
- (2) **品位は礼節の徳で、民主時代になったら一層この徳が守られてよい**。

(3)日本の言葉遣いがどうなるかは、将来の両親たちの大きな責任である。

(4)子供たちは躑で右にも左にも行けるのである。

P144 ~ 147

<コメント>

躑とは美しい立居振舞いと敬語表現を含む言葉遣いだと私は考える。1950年にPHP第41号に寄稿した柳宗悦氏の「言葉の躑」の大切さを訴えたこの文章を読むと、言葉の品位、家庭での言葉の躑の大切さがよくわかる。学校での教育や社会での教育に携わるすべての人々への貴重なメッセージでもある。大いに参考にしたい。

— 2016年8月13日(土) 林 明夫記 —